
利己主義な僕と彼女の事情

aoi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

利己主義な僕と彼女の事情

【NZコード】

N4381M

【作者名】

a o i

【あらすじ】 はじめに

暗い男の子と明るい女の子のお話し。文中に自害を連想させる描写がありますが、作者は自害を否定しません。拙い文章ですが、それでも宜しい方は考えて読んで頂ければ幸い。

生きてるのがとても億劫に思えた。こんな自分消えてしまえばいい、そんな子供の様なことをずっとずうと考えていた。考えたところで消える訳がない。僕は何がしたいんだろう。星空を見て、青空を見て、空は広い、地球は蒼いと言う人間が居る。当たり前のことだろう? つと言いたいところだけど、一体誰が決めたって言うんだ、それが当たり前だということを。常識って意外と常識じゃないんだよ、と誰かが言つてた。誰だけ、そうだ、クラスの中心人物佐藤さんだ。佐藤麻奈。僕はこの人が苦手だった、苦手というよりも近寄れなかつた。

いつも周りには誰かが付き添い、男女共に人気のある。告白されていることも度々見ていた。それだけならまだ良かつたものの、僕の得意としてる嘘笑いを彼女は見破つた。「笑いたくないなら無理に笑うのやめたら?」つと。クラスの誰も僕には見向きもしないのに、佐藤麻奈は僕に気付いた。委員会を決める時に、面倒臭い役柄をよく押し付けられる。云わば嫌がらせというやつだ。便所掃除、先生からの雑用、教室の窓ふき、それらを僕は笑顔で応じた。佐藤麻奈以外の奴は僕のことを『都合のいい暗いクラスメイト』としか思つてないだろうに。佐藤麻奈はそんな僕に気付いた。

左右対象でない彼らの事情

ある日のことだった、いつものように僕はクラスの男子に頼まれたゴミを捨てに焼却炉まで歩いてるところで。佐藤麻奈だ。本能がそう反応して、とっさに近くの端へと寄る。早く居なくなってくれ、そう心の中でぼやきながら、彼女が去っていくのを確認したところで出ていくとふいに肩を掴まれる。ヤバい。「大宮聰介くん、なんでそんなところにいるの?」少し威圧的な言葉に、力は無いが離すまいといった掌が肩に圧し掛かる。

「どにだつていいだろう」そう冷たく言い掌を片手で払うと、佐藤麻奈は眉の間に皺を寄せて怖い顔をした。関係ない。放つてくれ。そんな意味を込めてもう一度手を自分側へと引いたら、おかしい。微動だにしない。佐藤麻奈は僕の腕を掴んでいた。なんで?と今度は僕の顔が歪む。

「なんだ、意見言えるじゃない」飄々と彼女はそう僕に放つ。ああ、またしても彼女に僕が一つバレてしまつた。

好奇心旺盛な彼女の事情

大宮聰介は不思議な男の子でした。普通はやりたくない仕事を自らこなし、男子ならサボりがちの階段掃除だつて教室の床掃きだつて何でもやる。でも別に人を求めているオーラは感じない。なんなんだろうか、あの死んだ魚のような目をした男は。クラスのゆかちゃんもみなみちゃんも口を揃えて気持ち悪いって言つてるけど、私は気持ち悪さよりもどこから活力が湧いているのか、彼のエネルギー源がなんなのか不思議でならなかつた。

気になつてしまふと堪らない性格故に、大宮聰介を観察してみる。ふむふむ、彼は一般的な右利きでお弁当が豪華。だつておかげで冷凍食品がないもん。エビフライが一本も入つているのに、大宮聰介は一つ目を半分くらいまでかじり、戻した。家庭環境になんがあるとか?まあ、あんまりジロジロ見るのもバレてしまうし、今回の大宮聰介観察は終了とする。と自己で解決して、私は大好きなハンバーグを口の中に入れた。ああ、今日も幸せだなあ。

攻撃的な彼女の事情

大宮聰介観察一「日目。今日もお弁当は豪華、ハンバーグ弁当らしい。チーズがのつてゐるからこつてりが好きなのかなあ。今度は先生に言われたように作業をする奴をこつそりと覗き見ている。「ありがとうございます」とぞいます」声色は明るいんだけどなあ…なんでかしつくり来ない。むずむずする、こうやつて行動を起こさないのは性に合わないし。話し掛けでやろう、そう思つて大宮聰介に話しかけてみた。「大宮聰介くーん」逃がさない。肩をがしりと掴んで。「どうかしましたか?…えーと、佐藤さん?」大宮聰介はあたしを思い出したような素振りを見せて、につこりと笑つた。「笑いたくないなら無理に笑うの辞めたら?それ、嘘笑いでしょ」

大宮聰介は一瞬びっくりしたような顔をしたけど、否定もさせないままに私は話す「本当の笑い方はね、最初に口が笑うの。そして次に目が細まる。大宮くんは目と口が同時に動くに加えて片方の口許が歪んでいる」

聞いたことがある。とある誰かの人類学者が情緒的な表情は左右対象になり意識的または意図的な表情は左右非対象になる、と。ちょっと本を読んだだけだけだけれどね。大宮君は案の定固まつたまま動こうとしない。もう一回言おう「笑いたくないなら無理に笑うの辞めた

ら?」

悲観的な彼の事情

暴かれる気がした、この佐藤麻奈という女には。僕の、隠し持つて
いる闇を。怖かった。地味でいいんだ、都合良く使われて何もなく
友達も出来ず、勿論恋なんてしなくて。地味な大宮聰介で良かつた
のに。なんでこうも見つけるんだ。気持ち悪い、辞めて欲しい。多
分只の遊び半分であるひづ佐藤麻奈の表情に苛立ちを感じながら、今
度は真顔で言つてやる。

「これからゴミを捨てに行くんだ。退いてくれ」

「やついつ雑用とかもや、皿うつり置つて出でやつてこむの?」

「…関係ないだろ」

「教えてくれてもいいじゃない」

「じゃあ、此方から聞くけどさ。何で僕に構つの?」

「この世界に美しいものなんてない。」

「興味があつたからよ」

あるのは孤独な空虚と大人達が上手くやううとしてる陰謀だけ。ま
つさりに美しいものなんてない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4381m/>

利己主義な僕と彼女の事情

2010年10月28日01時03分発行